

慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resources

Title	19世紀の性科学と文学
Sub Title	Sexologie et littérature au XIXe siècle
Author	小倉, 孝誠(Ogura, Kosei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2012
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.103, (2012. 12) ,p.114(149)- 132(131)
Abstract	
Notes	川口順二教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01030001-0132

19世紀の性科学と文学

小倉 孝誠

セクソロジー
性科学の誕生

19世紀後半の文学、とりわけ小説においては、身体が重要なテーマのひとつになっている。フロベール、ゴンクール兄弟、ゾラ、ユイスマンス、モーパッサン、ミルボーなどにあつて、身体の表象にあたえられる位置はきわめて大きい。彼らが身体を発見したとまで言わないにしても、少なくとも彼らの作品においてはじめて、病理、セクシュアリティ、欲望、感覚、遺伝といった身体現象が、感情や心理と同じくらいに、あるいはそれ以上に本質的な出来事として語られるようになった。青年期の作品『テレーズ・ラカン』（1867）第二版の序文で、「私は性格ではなく、体質を研究しようとした」とゾラが宣言したのは、その意味で示唆的である。人妻の不倫という、すでにロマン主義時代からしばしば説話化されてきたテーマをあらためて取り上げながら、一般には禁断の恋という感情的ドラマとして表現されるものを、ゾラは身体的な本能と抑えがたい欲情に突き動かされる男女の物語として定着させた⁽¹⁾。

もちろん、性的なタブーがほとんどなくなり、身体の露出度が高まり、欲望の解放がひろく認められている現代とちがって、19世紀にはさまざまな規範とタブーが人々の身体観とセクシュアリティに枠をはめていた。超えるべきではない境界線が現代よりも明瞭であり、境界侵犯はきびしく処罰されるという時代だった。そうしたタブーや、規範や、境界線を時に

は巧妙にかいくぐりながら、また時にはそれに大胆に異議申し立てしながら、19世紀後半の作家たちは身体をきわめて意識的に主題化したのだった。

この時代の文学が身体を特権的なテーマにした背景には、医学や生理学の知識が普及したことが浮かび上がる。一般に小説は、同時代の科学的言説やイデオロギーと強く共振するものだが、19世紀後半はとりわけその傾向が著しい。それ以前であれば、おもにキリスト教の掟が人々の身体観、家庭生活、そして性道徳を律していたのだが、生物学と医学の進歩にともなう、科学の言説がそれらに決定的な影響を及ぼすようになった。文学と結びつきの強い私生活の領域では、今や司祭ではなく医者が大きな地位を占めるようになる。19世紀後半の文学においてさまざまなタイプの医師が登場して、物語の展開に関与するのは、けっして偶然ではない。

身体をめぐる科学的言説のひとつとして「性科学 **sexologie**」が存在する。この言葉はフランスで1910年代から、性にまつわる男女同権を求めた活動団体によって用いられ始めた。それ以前に流布していたセクシュアリティに関する医学的な知識と一線を画そうとする、強い意志がそこに示されていた。とはいえ、性や生殖に関する知は19世紀半ばから数多くの医学者、生理学者によって練り上げられた。彼らの思想、その前提になっている価値体系、著作のなかで用いられている表現は、21世紀のわれわれの目にはしばしば時代錯誤的に見えるし、時には単なる偏見でしかない。しかしそれらが、当時の人々の感性を形成し、文学の世界に無視しがたい衝撃をもたらしたのだから、あらためてその細部を吟味してみる価値はあるだろう。

ではいったい、19世紀後半の性科学は何を問題にしていたのだろうか。

愛と結婚へのオマージュ

性科学には大きく二つの潮流があり、著者も異なるカテゴリーに属する。

まず性科学は、生殖につながる「正常な」性から逸脱した倒錯を記述

し、その原因を探った。その倒錯とは同性愛や、サディズムや、マゾヒズムや、フェティシズムである。男女の異性愛、お互いの同意と快楽にもとづく身体的、精神的な交わりとしての性から外れた現象は、18世紀まで医学の対象ではなく司法の対象だった。たとえば同性愛は「自然に反する」性愛として法で罰せられ、当事者は裁判所で裁かれたものだった。しかし1804年のナポレオン法典により、フランスでは同性愛が刑法の対象から外され、その後19世紀末期になると、医学と精神病理学と法医学が、同性愛や、サディズムや、フェティシズムについて問いかけるようになった。こうして倒錯は「病理化」され、倒錯者は罰すべき犯罪者ではなく、治療すべき病人と見なされるようになる。アンブロワーズ・タルデューのような法医学者、シャルコーのような精神医学者が性倒錯に関する書物を著わしたのは、そのためである。

第二に、結婚と夫婦生活の幸福をめざす、きわめて道徳的かつ実践的な忠告を提示した一連の書物がある。時代と社会を問わず、結婚は男女にとって重大な問題であり、それはその時代の愛や性のあり方と密接に関係する。19世紀は実証主義と実験医学の時代であり、科学の言説があらゆる領域に浸透した。性や快楽(とりわけ女性の快楽)の領域も例外ではなかった。他方で、19世紀後半のブルジョワジーに起こった変化のひとつは、恋愛結婚が価値あるものとして位置づけられるようになったことだ。それにともない、結婚とは男女の相互理解にもとづく制度であり、そこには性的快楽が大きく作用すると意識されるようになった。夫婦関係がいわばエロス化されたのである。現代のわれわれからすれば当然のように思われもしようが、これは人々の感性にとって意味深い変革だった⁽²⁾。以下のページで考察したいのは、この第二カテゴリーの性科学と同時代の文学との関わりである。

この変化の射程を推し量るには、まず、それ以前の時代と比較するのがふさわしいだろう。

19世紀半ばまで、上流階級の男女はあまり愛が問題になることもなく、家同士が決めた相手と結婚するのが慣例だった。とりわけ女性は、娘時代

はしばしば修道院や寄宿舎で宗教的な教育を施され、そこから出た後は数年間の社交生活を送り、やがて親が選んだ男と結婚する。感情的には未熟で、性的には無知な状態で、よく知らない相手と結びついたのである。当然、不幸な結婚生活になることが稀ではなかったし、だからこそ19世紀文学には人妻の不倫を語った作品が多いのだ。

結婚生活の不幸の責任は夫にある、と喝破したのは『結婚の生理学』(1829)の著者バルザックである。人妻がなぜ道ならぬ恋に走るのかと真面目に問いかける作家は、これから結婚しようとする男たちに、あるいは結婚してまもない男たちに向かってこの本を書いたのだった。愛とは繊細な扱いを求める楽器である、とバルザックは述べる。

愛とは、あらゆる諧調のうちでもっとも美しい調べであり、われわれはそれにたいして先天的な感覚をもっている。女性は、快樂を奏でる甘美な楽器だが、その震える弦に精通し、その姿勢と、つつましい調べと、気まぐれで変わりやすい指使いを、学ばなければならない。[中略]ほとんどすべての男たちは、女性についても愛についてもまったく無知なままで結婚している。

妻のあやまちは、夫のエゴイズムと、無頓着と、無能にたいする弾劾行為にほかならない。(第一部「考察五」)⁽³⁾

妻に裏切られたくなければ、妻の行動と情緒の変化を見逃さないようにしなければならぬ。やめていた宗教上のお勤めを再開したり、夫を待たずに食卓についたり、頭痛と神経の発作が増えたり、夫の前ではばかりなく歌をうたったり、夫の些細な行為や言動を非難するようになったら、彼女の気持ちは離れかけている証拠だから、注意が必要だ。結婚という絆で繋がれているからといって、夫の立場に安住してはいけぬ、表面的な平穏さに欺かれて妻の心理と行動を見誤ってはいけぬ、とバルザックは真摯な口調で忠告する。『結婚の生理学』は、女と愛について無知な男たちにたいする辛辣な警告であると同時に、情熱と幸福を求める女たちを擁護す

る書物でもある。

バルザックは女性心理に精通した作家ではあるが、医学者でも生理学者でもない。19世紀後半になると、その医学者や生理学者たちが積極的に夫婦生活、性的快楽、妊娠、出産について論じた。それは夫婦生活にたいする衛生学的な配慮の表われであり、男女の結びつきを言祝ぐオマージュを示す。しかもそこには、出生率の低下という当時のフランスを不安に陥れた喫緊の社会問題が関わっていた。普仏戦争（1870）で隣国プロシアに大敗し、領土割譲まで強いられたフランスにとって、プロシアとの敵対関係を考えれば人口減少の危機はなんとしても回避しなければならなかった。夫婦のセクシュアリティは男女の私生活の問題にとどまるどころか、すぐれて国家的な課題だったということである。

ギュイヨ『実験的恋愛の手引き』

こうした結婚とセクシュアリティをめぐる性科学本の最初と言われるのが、ジュール・ギュイヨ（1807-72）の『実験的恋愛の手引き』である。出版されたのは著者死後の1882年だが、執筆されたのは第二帝政期というこの著作のなかで、ギュイヨはとりわけ若い男性読者に向けて女性の身体的、生理学的構造がどのようになっているかを解説し、夫婦のベッドで妻をいかに悦ばせるかという方法を具体的に述べていく。妻の快楽が彼女の身体的、精神的健康のために必要であり、家庭の平和に不可欠であると考えこの医師からすれば、夫の責任は重い。

この変化は大きい。というのもそれ以前の時代であれば、女性の性的快楽が生殖行為や妊娠に必要なだという認識はなかったし、それについて語ること自体がタブーだったからである。女性が、たとえば夫婦のベッドのなかであれ性行為の主体になることなど、医師や衛生学者たちは認めなかったし、女性には性的欲望など存在しない、と彼らは主張したのである。もし妻が興奮したら、その興奮を巧みに調整し、抑制することこそ夫の務めだとされていた。そうした考え方が19世紀後半から末にかけて根底から刷新され、女性の性的快楽がはじめて市民権を認められたと言ってよい。女性

の快楽は、医師と生理学者がまじめに論じる主題となった。

結婚の主要な目的は生殖であり、その生殖を円滑に実現させるためには男女のオーガズムが必要である、とギュイヨはためらうことなく言明する。この時代の性科学本では、オーガズムを示す言葉はかなり婉曲的で、時には微妙な隠喩に包まれているが、ギュイヨ自身は「性の痙攣 *spasme génésique*」という表現を使っている。あらゆる感覚が性的快楽に関与するが、男は触覚、とりわけ粘膜の接触に敏感で、女は乳房とクリトリスが性感帯だから、夫はそこにキスと愛撫を導くべきである、と著者は細かな作法を指南する。オーガズムは男女に至福をもたらし、その後は穏やかさと陽気さが生じ、結果的に夫婦の健康と和合がもたらされる。逆に満たされない生殖行為は疲労、脱力感そして精神障害を引き起こすことになる、とギュイヨは警告する。

欲望や官能性の欠落した女性はいないが、それを巧みに引き出せない稚拙で、粗野な男性が多いとギュイヨは嘆く。人間世界のあらゆることがそうであるように、性の営みにも技術と配慮が不可欠である。その時、男の役割は決定的に大きい。

妻を理解し、妻とともにシンフォニーを奏でるのは夫の務めである。そのシンフォニーによって妻は陶醉し、夫は彼女の信頼と、やさしさと、絶対的な服従を手に入れることになる。[……]

蜜月の時期に夫が若い妻をよく理解し、青年期の夢である筆舌に尽くしがたいような幸福感を彼女に味わわせれば、夫は妻から永遠に愛され、妻の支配者、君主になるだろう⁽⁴⁾。

逆に夫が妻を理解できず、その官能を充足させることができなければ、どうなるのだろうか。ギュイヨは述べる。「妻はやがて嫌悪感と苦痛を覚えるようになり、苛立ちがつのる。そして活発で、情熱的な女性ならば性格がとげとげしくなり、穏やかでもの静かな女性ならば陰気で、倦怠したひとになる」⁽⁵⁾。

興味深いのは、そしてこれは同時代の他の性指南書にも看取されることだが、『実験的恋愛の手引き』の著者が、男女の交接行為をしばしば音楽の比喩で語っていることである。

夫とは、自分の手と弓で和音を奏でたり、あるいは不協和音を出したりするヴァイオリン弾きのようなものだ。そして妻のほうは、性の観点からすれば、まさに四本ないし五本の弦をもった楽器そのものである。この楽器は弾き手が上手か下手かで、妙なる調べを発したり、耳障りな音を出したりする⁽⁶⁾。

妻から妙なる音楽を引き出せない男は、妻が性に無関心で、冷淡な女だと思ひ込むかもしれない。快楽に執着する男は、別の女を相手にそれを追求するかもしれないが、それは事態を改善することにつながらない。なぜなら「その場合、男は、ヴァイオリンを取り換えて新しい楽器を手にするれば、実際のところ自分には弾けない曲が奏でられるだろうと期待する、下手なヴァイオリン弾きに似ている」⁽⁷⁾からである。男女の結びつきが美しいハーモニーになるか、それとも悲しい不協和音を発してしまうか、それは男の態度によって決まる。先に引用した『結婚の生理学』のなかで、バルザックも男女の愛の機微を語るに際して音楽の隠喩を用いていたことを想起しよう。19世紀には作家にとっても医者にとっても、愛の営みとは楽器と奏者の共同作業であり、そこから美しいメロディーが生まれるかどうか、「夫婦の交響曲」が誕生するかどうかは奏者の技術にかかっていた。

とはいえ誤解してはならないが、夫婦生活における妻の快楽の重要性を強調するからといって、この時代の性科学者たちが自由恋愛や、快楽の無制限な解放を唱えていたわけではない。ギュイヨや、『実験的恋愛、あるいは十九世紀の女性の姦通の諸原因について』（1878）の著者ダルティエグや、『若夫婦の小聖書』（1885）の著者モンタルバンは異口同音に、妻の快楽は彼女が貞淑であるための保証だと主張した。妻が不倫の誘惑に駆られないためにこそ、夫は妻に惜しみなく愛撫をあたえるべきなのだ。

性科学のジェンダー性

医師たちが、それまでほとんど口にされることのなかったセクシュアリティの奥義に踏み込み、女性の身体と生理をかつてないほど科学的に記述したのは、性の自由化を唱導するためではなく（それは20世紀の課題となる）、あくまで夫婦の相互理解を高め、受胎がつつがなく行なわれ、健康な子供が生まれるよう配慮するためであった。彼らは、元気で、健康な赤ん坊を作るためにはどうしたらよいかをめぐって、夫婦の年齢の組み合わせ、交接の季節や時間帯や頻度、さらには性交の体位に至るまで、細かな忠告をあたえることをためらわなかったくらいである。そこには、優生学の思惑も絡まっていた。

性科学者たちは、家庭の平和と子孫の維持のためにセクシュアリティを論じ、快楽を奨励した。問題になっていたのは、あくまで家庭の秩序に収まるかぎりでのセクシュアリティであり、快楽であって、売買春の世界や、未婚の男女の性は彼らの関心の埒外にあった。ブルジョワ階級において恋愛結婚が価値づけられるにともなって、それを正当化し、制度として円滑に機能させるためにこそ、彼らは夫婦のベッドでの営みを規範化しようとしたのである⁽⁸⁾。

この点で、19世紀末のフランス社会に、社会的ダーウィニズムの思想がひろく浸透していたことを想起する必要があるだろう。ダーウィンの『種の起原』（1859）がクレマン・ロワイエによって仏訳されたのが1862年。生物の進化は自然淘汰の結果であり、その自然淘汰はきびしい生存競争と、メスを獲得するためにオス同士が繰り広げる熾烈な性的淘汰から生じるという理論は、イギリスの哲学者スペンサーの思想の影響圏で、人間社会の進化にも適用される。民族や国家の興亡も、生物学的な進化の法則に規定されるという考え方が支持を得たのである。それが極端に推し進められれば危険な排他主義や民族絶滅の思想にまで至ることは、20世紀の歴史が示しているところだが、当時はまだそこまで至っていない。

いずれにしても、結核や梅毒やアルコール中毒などの病理が蔓延し、パ

りなどの都市部で犯罪率が上昇して社会不安を募らせ、子供の出生率が低下して人口減少の脅威が現実になりつつあった19世紀末という時代において、結婚、家庭、出産はフランスの国力を維持するために守らなければならない価値だった。しかも当時は、ヨーロッパ列強がアフリカ、中近東、さらにはアジアに植民地を広げていた植民地主義の時代であり、人口を増やすことは外交的にも、軍事的にも求められていた。結婚の奨励と性の規範化は、男女のプライベートな問題に還元されるどころか、国内においても、対外的にも、きわめて政治的な課題にほかならなかったのである。

19世紀の性科学者の言説には、しかしながらひとつ重大な欠落がある。それは男の医師や生理学者によって、男の読者用に書かれた、男のための言説であり、セクシュアリティのもう一方の当事者である女の視点がない。そもそも、女が読むことが想定されていないようである。語るのはつねに男であり、けっして女ではないのだ。能動的に振る舞うべきなのはつねに男であり、女はつねに受動的で、男の愛撫を受け入れる客体として位置づけられている。この言説は、女性の性や快楽に関する男のまなざしと知を体系化したものであり、セクシュアリティは男の観点から研究されている。『実験的恋愛の手引き』や『若夫婦の小聖書』はもっぱら男にたいして、どのように振る舞うべきかという規定と忠告を述べているだけである。女性はセクシュアリティの対象であって、その主体ではないのだ。現代のわれわれから見れば、それがこの時代の性科学の限界であろう。

独身主義という脅威

このように医師たちは社会衛生学の立場から、結婚が男女の人格的発展にとって不可欠であり、身体的、精神的な健康を守るために必要だと異口同音に説いた。そのため結婚にふさわしい年齢や、夫婦生活の細部にいたるまでさまざまな実践的忠告を惜しまなかった。この時代の性科学書や医学事典には、現代のわれわれからすればほとんど気恥しいまでに、結婚礼賛の言説が並んでいる。

たとえば、ピエール・ガルニエ博士の『法的、衛生的、生理学的、そ

して道徳的観点からみた結婚。その義務、関係、そして夫婦におよぼす影響について』(第十版、1879)から引用してみよう。

しかるべき条件のもとで結ばれた婚姻はきわめて自然で、穏やかで、健全である。それが男女の衛生、健康、長命にあたえる利益と恩恵は、今日では統計によって断固として証明されている。そして婚姻は公衆の道徳と繁栄にとってじつに確かな保証ともなる。

それにふさわしい年齢と条件のもとでなされた結婚は、個人にとって幸福の源であり、社会にとって道徳性と秩序を守る確実な保証である。個人のさまざまな力と活動をうながすことで、結婚は良い影響を及ぼし、その影響は健康、風俗の改善、長命となって示される⁽⁹⁾。

結婚を勧め、出産を奨励する医師や性科学者からすれば、嘆かわしいのは独身状態である。それは個人の健康にとって有害であり、社会の安寧を損なうものだからだ。実際、ガルニエは「独身とは死であり、無である。したがってそれは、道徳と衛生学によって断罪されている」⁽¹⁰⁾とためらくことなく言明した。現代日本なら、差別的な言辞として物議を醸すところだが、これが当時多くの読者をもった医学者の発言であるということは、無視できない。

それと呼応するかのように、19世紀末時点における医学の思想と実践の集大成である、百巻からなる『医学百科事典』の第41巻(1874)には、「結婚」という百ページにわたる項目が収められている。医学事典が結婚を取り上げるとのこと自体、それが科学的、社会的な関心の対象であったことをよく示している。項目の著者アドルフ・ベルティヨンによれば、人間は家族のおかげで生を享け、教育を受けられ、成長していくのだから、独身を貫いて家族を形成しないことは、社会と人類にたいして果たすべき義務を怠っている、ということになる。

独身者の存在は社会の脅威である。少なくとも風紀警察はそれを指摘して、公衆に不信感を抱かせるべきだし、国家はその脅威を絶えず減少させるよう努めなければならない⁽¹¹⁾。

独身主義にたいする、いかにも激しい断罪の言葉である。独身者は生きていること自体が社会にとっての危険である、とされているのだから。当時の医学は、まさに規範と秩序を説く科学だった。そしてこのような言説が綴られた背景には、仮想敵として、まさに結婚や家庭に異議を申し立てる文学、独身主義を標榜する作家たちがいた。批評家ジャン・ポリが「独身者の文学」と命名したこの文学は⁽¹²⁾、いったい何を物語っていたのだろうか。

女嫌いの文学

独身の礼賛、さらに女嫌いの感性は、19世紀後半の芸術家小説に典型的に表われる。ロマン主義時代であれば、女性は想像力を刺激する詩神ミューズになりえたが、リアリズム文学や自然主義文学では、女性は逆に、芸術家を不毛にしてしまう不吉な存在である。多くの作家は女性への嫌悪を隠さず、結婚生活の束縛は創造行為を萎えさせると言明してはばからなかった。

たとえば、ゴンクール兄弟（兄エドモン1822-96、弟ジュール1830-70）の共作になる小説『マネット・サロモン』（1866）を取り上げてみよう。コリオリスとアナトールという二人の画家を主人公とするこの作品では、1840年代から50年代にかけて画塾で学ぶ若い芸術家たちの習俗、希望、挫折、そして画壇やサロン展のありさまが活写されている。才能ある画家であり、オリエントに出かけて修行したコリオリスと、ローマ賞に落選し、師のアトリエを離れて放浪するアナトールは、遺産を手にしてからパリで共同生活をするようになる。やがてコリオリスはモデルのマネットと恋に落ち、一時期はパリ南郊バルビゾン村に住んで風景画の制作にあたり、かなりの成功を収める。しかしそれは一時の成功で、マネットが子供を産

み、恋人と同居すると、二人の画家の友情は破れる。コリオリスの作品は評価が下がり、金銭と世間体ばかりを気にするマネットとの生活は、しだいに彼の才能を枯渇させていく。最後にコリオリスはマネットと正式に結婚し、アナトールは画業を放棄してパリ植物園の助手となる。

このように要約される『マネット・サロモン』において、マネットに出会う前のコリオリスは独身主義者である。女性や結婚制度そのものを憎むからではなく、女性といっしょに暮らすことが精神の自由や創造の靈感を阻害する、と考えるからである。

コリオリスは結婚しないと心に決めていた。結婚が嫌だったからではなく、それが芸術家に許されない幸福だと思われたからである。芸術の仕事、創作の追求、作品の静かな懐胎、努力の集中は、やさしくて気の紛れる若い女と共にする結婚生活とは両立しえないと考えていた。[中略]

彼によれば、独身こそ芸術家に自由と、力と、知性と、良心を保証してくれる唯一の状態なのだった⁽¹³⁾。

そうした決意にもかかわらず、画家はモデルを務めるマネットに魅かれ、いっしょに暮らし、最後には妻とする。コリオリスが《トルコ風呂》と題された東洋趣味の作品を描いているとき、主題や構図や人物のポーズが定まっているのに、そこに現実感をもたらす要素が欠落していた。そこに現われたのがマネットであり、輝くばかりの肉体をもち、鏡のなかでみずからの姿に陶酔するほどの彼女は、その欠落を充填してくれる自然であり、現実だった。身体的存在としての女性は芸術表現にとって不可欠な要素だが、芸術家である男にとっては危険な誘惑であり、危うい躓きの原因にはほかならない。

愛や欲望という人間性と、芸術という超越性を調和させることはむずかしい。女性の肌をもたらす快樂と、作品によって実現される絶対性はお互いを排除しようとする。一方が他方の犠牲に供せられることが稀ではな

い。芸術家はたんなる人間以上の存在であり、またそうでなければならない。愛や情熱を創造活動の靈感源と見なすようなロマン主義的観点は、もはや時代錯誤である、とゴンクール兄弟は示唆する。愛や情熱は、創造行為をさまたげる障害にさえなってしまう。コリオリスはマネットの出現によって、芸術家と人間の相克、超越性と現実性の葛藤を生きる運命を背負うことになるのだ。

アトリエのなかで、画家とモデルは宿命的に遭遇する。モデルである女性性は、表現が達成されるために必要だが、芸術家にとっては才能を衰えさせる危険性が高い。ましてや女性が妻となり、さらに母となれば、芸術家にとって家庭は牢獄に変貌する。男にとって夫となり、父となることは幸福のひとつのかたちには違いないが、芸術と芸術家にとっては頹廢や墮落の原因である。ゴンクール兄弟の小説において、女性は芸術の敵であり、感情的なコミットと美学的なコミットは両立しえない。作品の最後でコリオリスがあらゆる野心と理想を喪失し、平凡な日常性に埋没していくのは、芸術家の嘆かわしい死を象徴している。こうして『マネット・サロモン』は独身と禁欲を称え、女嫌いを標榜する。

19世紀フランス文学には、バルザックの『知られざる傑作』(1832)から、ミュルジュールの『ボヘミアンの生活情景』(1848)、ゴンクール兄弟、ゾラの『制作』(1886)、そしてモーパッサンの『死のごとく強し』(1889)に至るまで、芸術家小説の系譜と呼べるものが存在する。そこでは作家や、とりわけ画家が恋をし、ときには結婚もするが、結末はつねに破局であり、悲劇である。

愛にコミットしない独身者、あるいは結婚した後に家庭生活が芸術創造を損なうと自覚する男は、19世紀後半になってはじめて登場したわけではない。それ以前の文学にも、独身者たちは現われる。ただしその場合、独身者とは女を征服することをこのうえない快楽とする誘惑者(たとえばドン・ファンの系譜)や、あるいは逆に職業的に妻帯を禁じられている者(聖職者)や、貧困、病、身体障害などにより結婚を望めない者たちであった。バルザックは、やむを得ない事情によって独身を強いられる場合を除

いて、エゴイズムによって独身を貫く男たちをきびしく糾弾した。彼の小説『ピエレット』（1840）の序文では、「独身とは社会に反する状態」であり、「根っからの独身主義者は文明を篡奪し、文明に何も返してやらない」と批判されている。

19世紀後半の特徴は、芸術創造と自由の名において独身が正当化され、さらには称賛され、その結果として、結婚に疑問符が突きつけられたことである。独身主義を標榜する作家や芸術家は、青春時代が過ぎて後もなおポヘミアン的な生活を続けようとする。独身とはやむを得ず課される呪われた状態ではなく、積極的に引き上げられた立場、意志表明になった。芸術という新たな宗教は、俗世間の規範を無視して、芸術に身を捧げる聖職者を求めたのだった。

結婚や家庭をめぐる、文学の表象と性科学の言説の対立は明らかである。19世紀末において、社会道徳と衛生医学に依拠する性科学は独身者を墮落した者、デカダンな人間として断罪する傾向が強かった。それは芸術家＝独身者を社会の内部に棲息する異邦人と規定し、社会の辺境に追いやることにつながっていた。

ゾラ『豊饒』の射程

ところがここに、独身者の文学の対極に位置し、結婚と家庭と出産を奨励した性科学のイデオロギート同調するかに思われる作品が存在する。エミール・ゾラ最後の連作『四福音書』の第一作、『豊饒』（1899）である。

晩年のゾラは、当時のフランス社会で高まっていた人口減少の不安に鋭く反応した。人口調査が行なわれるたびに、フランスの人口の伸び率が低下し、このままではいずれ人口減少が現実のものになる、と警鐘が鳴らされていたのである。1896年5月23日付の『フィガロ』紙に発表された「人口の減少」と題された論説記事のなかで、ゾラはその原因がアルコール中毒や梅毒、田舎の過疎化、都市部での物価の高さ、安楽な生活を守るための産児制限にあることをあらためて喚起する。思想と芸術の領域で言えば、ショーペンハウアーの厭世主義哲学、処女性と不毛な情念を称揚する

ワーグナーのオペラ、彼らの影響を受けたデカダン派がたくましい生命力を嫌悪し、不毛な性の陶醉を称えた。それに対してゾラは、フランスと世界の復興のために、女性の多産を希求してやまない。記事は次のような一文で結ばれている。

フランスで生の廃棄物がなくなり、善良で不滅の女神、永遠の勝利をもたらす女神のように生が崇拜されることを私は望んでいる。力強く自然な文学、雄々しくて健全な文学、言葉と物にいとむ誠実さを持ち、未来世代の溢れるごとき生の奔流のために子を産む愛をあらためて名誉あらしめ、堅固さと平和の巨大なモニュメントを創りあげてくれるような文学がフランスに登場することを、私は望んでいる⁽¹⁴⁾。

『豊饒』は、その望みをみずから実現しようとした書物にはかならない。作品の思想と概念を書き留めた最初のプランでは、生命の流れ、種の伝播、力強い受胎が強調されている。『『豊饒』』においては最初から最後まで、芽が奔流のように動くこと。種子と生命が流れ、いたるところで溢れ出すようにしなければならない。絶えず受胎状態にある世界の痙攣。それこそがこの主題を高める偉大さであり、大胆さである⁽¹⁵⁾。種子 *semence* とは精液でもあり、痙攣 *spasme* とは性的快感の頂点に通じる。ゾラは植物という自然界の豊饒なる生命力と、人間の生殖行為をパラレルな関係に置いているのだ。

小説のなかで、主人公のマチューはパリにあるボシェーヌ工場で働いており、妻マリアンヌとのあいだにすでに四人の子供をもうけた。その子沢山ぶりは、同僚たちの冷笑的である。実際マチューの同僚たちは財産の細分化を懸念し、一人娘に多額の持参金を付けてあげられるようにと、子供の数を制限している。他方マチュー夫妻は、子供をたくさん産み育てることに幸福を感じ、文明と生命の名において多産性を支持する。マリアンヌは豊かな乳房と、たくましい腰をもった、母となるべく生まれたような女性である。これは母性への、多産な女性への無条件のオマージュなのだ。

ゾラの作品で母性が称賛されるのは、これが初めてではない。『ルーゴン＝マッカール叢書』の掉尾を飾る『パスカル博士』は、パスカル亡き後、彼の子を産んだ姪のクロチルドがその子に乳をふくませながら、未来への夢を託すという象徴的な場面で閉じられる。『三都市』叢書の最終巻『パリ』のラストシーンでは、ヒロイン・マリーが自分の幼い息子ジャンを裸の胸元に抱えた後、太陽に向かって高く差し上げる場面が語られている。どちらも幼な子に乳をあたえる母親が、穏やかな至福の雰囲気のなかに浸っている。『豊饒』では、母性へのオマージュがより官能的に描かれ、身体と欲望、そして両者が結合する生殖がまるごと肯定されているのが特徴である。

マチューはやがて工場の仕事を辞め、郊外のシャントブレッドに土地を購入して、農業に従事することになる。はじめは不毛な荒地だった土地を懸命に改良して耕作可能にし、やがて周囲の土地を買い足して、同じように肥沃な耕地に変えていく。その間、マリアンヌは男女合わせて12人の子供を産む。そしてその子供たちもまた結婚し、多くの子供に恵まれて大家族を形成することになり、マチューは一族の族長として君臨することになるだろう。土地の豊饒さ *fécondité* とマリアンヌの多産性 *fécondité* はあざやかに呼応するのだ。

しかも12人の子供が誕生し、成長するのだから、当然長い時間が経過しているのに、シャントブレッドはまるで時間の侵食を免れた地上の楽園であるかのように、マチューとマリアンヌはいつまでも若さを保っているかのようなのである。実際ユートピアの特徴として、周囲の世界の時間軸とは異なる時間軸にしたがって生活が営まれていく。というよりむしろ、ユートピアでは時間の流れが停止したようになる。母性と生殖へのオマージュは、主人公たちの土地をユートピア空間に変貌させたのだった。それがもっともよく語られている第4巻では、巻を構成する5章の末尾はすべてまったく同一の文章で閉じられる。

土地と女をつうじて、豊饒の作用、偉大で立派な作用が相変わらず

続いていた。土地と女は破壊に打ち勝ち、新たに生まれた子供に食べ物にあたえ、苦しみのなかでも愛し、望み、闘い、働いた。そして絶えずより多くの生命と希望に向かって、歩み続けるのだった⁽¹⁶⁾。

多産は家庭と共同体の原則であり、文明の継続を保証する営みである。夫婦の存在理由はそこにあり、欲望と生殖はそれによって正当化される。労働への賛歌、子沢山の家庭が繁栄するユートピア的な物語、そして大地と一体化した女性の母性を称える叙事詩——それがゾラの『豊饒』という作品である。

多産と生殖を肯定し、実践するマチューとマリアヌの傍らに、それを回避する、さらには否定する者たちが登場する。子供を作らない夫婦、放蕩と快楽に明け暮れ、結婚しないブルジョワ女、妊娠を嫌って卵巣摘出手術を受けた女、妊婦をひそかに墮胎させる産婆、同性愛者たちなど、性の営みをしながら生殖と母性を拒む人たちである。『豊饒』の語り手は、そうした人たちにたいして情け容赦ない。子供のいない夫婦は家庭が崩壊し、事業までも破産するし、快楽だけを求める女は病に冒され、不妊手術を受けた女は精神錯乱をきたし、墮胎させる産婆は悲惨な最期を遂げる。

ゾラはこうした者たちの行為と心性を叙述するため、ベルジュレ博士の『生殖行為の遂行における欺瞞』(1868)を参照した⁽¹⁷⁾。その副題は「個人と家庭と社会にとっての危険と欠点」となっている。ここでベルジュレが言う「欺瞞」とは、さまざまな避妊手段のことで、著者は性交中断、コンドームの使用、女性の閉経後の性交などを列挙している。避妊が、とりわけ女性の生理構造に引き起こすさまざまな医学的弊害が指摘され、「欺瞞」が長年にわたって繰り返されれば、子宮筋層炎、がん、神経症などが惹起される、と真剣な口調で警告した。この著作も、先に問題にした19世紀後半の性科学のイデオロギーを例証する一冊であり、ここでもまたゾラと性科学の言説の接点が見出される。

子供を産み続けるマリアヌは、美しさとみずみずしさを維持するのに対し、母性に対立する女性たちは早々に老いて、病んでいく。マチュー夫

妻の多産は肥沃な土地と豊かさによって報われ、生殖を拒む他の人々は没落と崩壊に見舞われる。一方には幸福と、美と、健康、他方には不幸と、病と、狂気と、死。図式的と言えあまりに図式的なこの二元論は、現代の読者の苦笑を誘うほどだが、作品の思想的な次元が同時代の風潮とあざやかに共鳴していることは、明らかである。さらに付言するならば、多産への賛歌は、19世紀末の共和制イデオロギーに同調するという政治的な側面もはらんでいる。ヒロインの名前がマリアンヌだということ、つまりフランス共和国を象徴するアイコンとしての女性、豊かな肉体を有し、多産性を示唆する女性と同じ名前だということは、もちろん偶然ではない。

19世紀後半という時代、多くの作家が文学活動をつらぬくために独身主義を標榜し、彼らの作品は、結婚と家庭生活によって創造性を喪失していく芸術家を登場させた。そうした独身者の文学が栄える一方で、医師や生理学者たちは、結婚と家庭の価値を説き、女性の多産を称えてやまなかった。それは、人口減少の危機や民族の衰退という不安が漂う時代風潮のなかで綴られた、性科学の言説である。そしてゾラの『豊饒』は、主人公たちの多産と幸福を際立たせることによって、このような時代の論争に参加したのだった。

注

- (1) 19世紀後半の文学における身体テーマについては、次の研究を参照のこと。Jean-Louis Cabanès, *Le Corps et la Maladie dans les récits réalistes (1856-1893)*, Klincksieck, 2vol., 1991. 小倉孝誠『身体文化史』、中央公論新社、2006年
- (2) Cf. Alain Corbin, *Le Temps, le désir et l'horreur*, Aubier, 1991. [邦訳：アラン・コルバン『時間・欲望・恐怖』、小倉孝誠・野村正人・小倉和子訳、藤原書店、1993年] Sylvie Chaperon, *Les Origines de la sexologie (1850-1900)*, Louis Audibert, 2007.
- (3) Balzac, *Physiologie du mariage*, dans *La Comédie humaine*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.XI, 1980, p.954.
- (4) Jules Guyot, *Bréviaire de l'amour expérimental* (1882), Payot, 2012, pp.85-86.

- (5) *Ibid.*, p.91.
- (6) *Ibid.*, p.92.
- (7) *Ibid.*, p.87.
- (8) Alain Corbin, *op.cit.*, 特に« La petite bible des jeunes époux »を参照せよ。
- (9) Pierre Garnier, *Le Mariage dans ses devoirs, ses rapports et ses effets conjugaux au point de vue légal, hygiénique, physiologique et moral*, Garnier, 1879, p.VII, p.86.
- (10) *Ibid.*, p.98.
- (11) *Dictionnaire encyclopédique des sciences médicales*, t.41, 1874, p.77.
- (12) Jean Borie, *Le Célibataire français*, Le Sagittaire, 1976.
- (13) Goncourt, *Manette Salomon*, « Folio », 1996, pp.226-227.
- (14) Émile Zola, « Dépopulation », dans *Œuvres complètes*, Cercle du livre précieux, t.14, 1969, p.790. [邦訳: ゾラ『時代を読む 1870 - 1900』、小倉孝誠・菅野賢治(編訳)、藤原書店、2002年、p.229]
- (15) Émile Zola, *Fécondité*, dans *Œuvres complètes*, Cercle du livre précieux, t.8, 1968, p.508.
- (16) *Ibid.*, pp.262, 280, 297, 316, 331.
- (17) Bergeret, *Des fraudes dans l'accomplissement des fonctions génératrices. Dangers et inconvénients pour les individus, la famille et la société*, Baillière, 1868.

*本論は、拙著『恋するフランス文学』（慶應義塾大学出版会、2012年）の第2章と、内容的に一部重複していることをお断りしておく。